

大学入学共通テストの段階表示を合否判定に用いた新入試の実施 ——2025年度鳥取大学工学部総合型選抜Ⅱの事例——

森川 修, 進藤 明彦, 山根 俊喜 (鳥取大学)

鳥取大学では、2025（令和7）年度入試から工学部全学科で総合型選抜Ⅱ（大学入学共通テストを課す）を実施した。出願は大学入学共通テストの受験前に行い、募集人員35人に対し、志願者は52人、志願倍率は1.5倍だった。この入試では、大学入学共通テストの段階表示を合否判定に活用した。各学科が必要とする3教科4科目において、段階表示で一定の得点以上であることを合格の条件とした。合格者は29人で、実質倍率は1.8倍だった。鳥取県内高等学校の教員からは、合格基準が明確で分かりやすく、第1志望とする生徒に向かわせやすい入試であるとの評価を得た。

キーワード：大学入学共通テスト, 段階表示, 総合型選抜, 入試制度

1 はじめに

2021（令和3）年度入試より、大学入試センター試験から大学入学共通テストに移行し、いくつかの変更点が見られた。

その1つに成績提供の方法が挙げられる。従来の科目別得点とともに「段階表示」の提供が新たに行われた。大学入学共通テストの段階表示には「スタナイン」という方式を用いる。スタナインとは、受験者を得点順におおよそ4, 7, 12, 17, 20, 17, 12, 7, 4%の9つの群に分割し、科目別得点の低い方から順に1から9の9段階に換算する方法を用いたものである（大学入試センター, 2024）。この方式の最大の特徴は、平均点や得点分布の違いに関わらず、受験者が各科目の受験者全体の中でどの位置にいるかがわかることである。また、受験者の得点分布が正規分布であったとするならば、偏差値に置き換えることができるため、指標として分かりやすいと思われる。

段階表示に関する議論は、沖（2025）によってまとめられている。中央教育審議会（1999）において、“いわゆる1点差刻みの客観的公平のみに固執することは問題であると考えられる。”と指摘されて以来、20年以上が経過して、大学入学共通テストの段階表示の提供により、ようやく1点刻みの選抜からの脱却が可能となった。

しかし、初年度と2年目では、個別大学の入試の合否判定に活用した例は確認できなかった。2023（令和5）年度入試で静岡理科大学が「指定された3教科の段階表示全てが『5段階以上』の者」を満たした成績上位者を給付奨学生としていた（静岡理科大学, 2022）。さらに、2025（令和7）年度入試の一部（一般選抜共通テスト利用）で「段階表示が全て『5段階以上』の者」に加え「指定された3教科の合計得点率『65%以上』の者」のいずれかを満たすことが給

付奨学生の条件となっていた（静岡理科大学, 2024）。これが大学入試において、大学入学共通テストの段階表示を用いた初めての例と思われる。

鳥取大学では、2025（令和7）年度入試から、工学部全学科で総合型選抜Ⅱ（大学入学共通テストを課す）を実施し、その合否判定に大学入学共通テストの段階表示を用いて選考した。本稿では、入試の予告、試験科目等の設計、合否判定基準の設定、試験実施、合否判定までの詳細について報告する。

2 入試の実施について

2.1 入試の予告

大学入試には、いわゆる“2年前予告ルール”がある。入学志願者保護の観点から、入学者選抜における変更等について、入学志願者の準備に大きな影響を及ぼす場合には、2年程度前には予告・公表することとされており、新しい入試を実施する場合はこれに該当する。それに従って、鳥取大学入学試験情報のホームページで告知したのは、入試実施の約2年前に当たる2022（令和4）12月だった。「令和7年度鳥取大学入学者選抜の実施教科・科目等について（予告）」として、工学部化学バイオ系学科と社会システム土木系学科の2学科で、新たに大学入学共通テストを課す総合型選抜の実施を告知した。さらに、備考欄に「大学入学共通テストの成績について、段階表示（スタナイン）の利用を検討しています。」と記載した。そこで初めて、国立大学の入試（個別学力検査）において、大学入学共通テストの段階表示を活用することを告知した（森川ほか, 2024）。

その後、2023（令和5）年度入試の状況を受けて急遽、機械物理系学科と電気情報系学科も総合型選抜Ⅱの実施を決定し、2023（令和5）年7月に公表した。

さらに、2024（令和6）年2月に化学バイオ系学

科において、大学入学共通テスト「理科」の受験を要する科目数を 2 科目から 1 科目に変更することを掲載した（鳥取大学, 2024a）。なお、これら大学入学共通テストの受験を要する教科・科目の詳細は、2.2.3 で述べる。

2.2 入学者選抜要項

鳥取大学では入学者選抜要項を毎年 7 月中旬に公表している。2025（令和 7）年度入試においては、2024（令和 6）年 7 月 19 日に鳥取大学入学試験情報のホームページ上で公表した（鳥取大学, 2024b）。

記載内容は、入試日程、募集人員、出願要件、選抜方法、合否判定方法である。大学入学共通テストも含めた入試日程を表 1 に示した。

表 1 2025 年度鳥取大学工学部総合型選抜Ⅱ入試日程

項目	日程
インターネット 出願登録期間	2024 年 10 月 26 日（土）～ 2024 年 11 月 7 日（木）
出願書類等 提出期限*	2024 年 11 月 1 日（金）～ 2024 年 11 月 7 日（木）
個別試験（面接）	2024 年 11 月 23 日（土）
大学入学共通テスト （本試験）	2025 年 1 月 18 日（土）～ 2025 年 1 月 19 日（日）
合格発表	2025 年 2 月 12 日（水）
入学手続締切	2025 年 2 月 18 日（火） （必着）

* 郵送の場合、2024 年 11 月 7 日（金）の消印有効

2.2.1 入試日程

出願は、大学入学共通テストを受験する前に行う、いわゆる「前出し」とした。その理由の 1 つに、鳥取大学工学部を第 1 志望とする入学者確保がある。毎年、鳥取大学では、全合格者に対して、入試に関するアンケートを送付している。回答は入学手続きの書類とともに提出するため、回収率は 100% である。つまり、入学者の状況がわかるアンケートとなっている。これによると、ここ数年、工学部入学者のうち、合格した学科が第 1 志望だった割合は、3 割程度である。他学部では少なくとも半数以上、多いところでは 3/4 以上であることから、きわめて低い値である。

工学部（理工学部を含む）は、国立大学の多くに設置されており、同じような学科構成であるため、個別大学の特色が打ち出しにくい。そこで受験生側が出願する大学を選ぶ際、入学の難易度を用いる傾向にある。国公立大学の一般選抜は、大学入学共通テスト実施後の 8 日後から出願開始となる。それまでに大学入学

共通テストの自己採点結果を受験産業に送り、合格判定システムから出願大学を選ぶ受験生は多いと推測される。大学入学共通テストで想定した得点に達しなかった場合、第 1 志望を諦めざるを得ず、それ以外の大学に出願しているのが現状と考えられる。そこで、出願時期を大学入学共通テストの受験前にすることで、その結果に関わらず、鳥取大学工学部を第 1 志望とする者の出願が増加すると考えた。

さらに、鳥取県やその近隣の受験生確保につながることも期待した。受験産業の合格判定システムでは、前年度の実績が反映され、志願者の増減を繰り返す、いわゆる「隔年現象」が起きやすくなっている。そうすると、受験する年によって合格圏に入る場合もあれば、不合格となることも起こり得る。鳥取に居住していれば幼少期から地元の鳥取大学を知る機会は多く、身近な大学が志望大学となりやすいと考えられる。しかし、鳥取県は日本で一番人口が少ないために他県からの志願者の影響を受けやすく、その結果が地元占有率の低さの一因になっていると推察される。鳥取県を中心とした鳥取大学を地元の大学として認知していて第 1 志望と考えている者のためには、外的要因に左右されない大学入学共通テスト受験前の出願は、適切であると考えた。

個別試験は面接だけとし、実施は大学入学共通テストの受験前とした。もし、大学入学共通テストの受験後に実施した場合、他の入試（学校推薦型選抜Ⅱや一般選抜）の実施や準備等で日程が非常にタイトであるという大学側の理由がある。また、面接を先に終わらせて大学入学共通テストに向けて集中したいと考える受験生側の心理も考慮し、11 月下旬に設定した。

2.2.2 募集人員

募集人員は、機械物理系学科、化学バイオ系学科、社会システム土木系学科が 10 人、電気情報系学科が 5 人の合計 35 人であった。

入学センターからは事前に工学部に対して、少なくとも入学定員の 10% を超えること、できれば 20% 以上の工学部全体で 100 人程度の募集人員にすると、大きなインパクトを与えられ、新入試を認知してもらいやすいこと等を提案し検討を依頼した。しかし、工学部入試委員会では、新しい入試で志願者の動向が予想できず、現状変更を望まないという意見が大勢を占めた。工学部 4 学科を合わせた入学定員は 450 人であり、総合型選抜Ⅱの募集人員は、全体に占める割合で 8% 弱だった。

2.2.3 大学入学共通テストの受験を要する教科・科目

大学入学共通テストの受験を要する教科・科目数は、すべての学科で3教科4科目だった。2.1で記載したとおり、当初の予告で化学バイオ系学科は、3教科5科目だったが、理科を2科目から1科目に減じた。これは、1学科のみ負担が大きく見られるのを避け、他学科と科目数を合わせたためである。

受験を要する教科・科目であるが、数学は全学科で2科目（数学①に相当する「数Ⅰ、数A」、数学②に相当する「数Ⅱ、数B、数C」）を課した。それ以外の教科・科目はすべての学科で異なっていた。数学以外の受験を要する2つの教科・科目は表2にまとめた。

表2 2025年度鳥取大学工学部総合型選抜Ⅱにおける数学以外に大学入学共通テストの受験を要する教科・科目

学 科	数学以外に受験を要する教科・科目
機械物理系	外・英語（必須） 理・物理（必須）
電気情報系	外（英、独、仏、中、韓から1） 理・情（物、化、生、地、 情報Ⅰから1）
化学バイオ系	国・外（国語、英語から1） 理（物、化、生から1）
社会システム 土木系	外（英、独、仏、中、韓から1） 理（物、化、生、地から1）

*理科は、第1解答科目の得点

機械物理系学科では、選択できる教科・科目は無く、外国語は英語、理科は物理を必須科目とした。電気情報系学科では、学科名称にもある「情報」を理科の第1解答科目との選択とした。化学バイオ系学科は、理科は地学以外の3科目からの選択とし、語学系の教科である国語と英語の選択とした。これは、語学の基礎学力があれば良いとの理由からである。社会システム土木系学科は、外国語と理科を教科として指定したが、科目は受験生が選択する方法とした。

2.3 学生募集要項

鳥取大学では、11月に試験を実施する入試の場合、学生募集要項を公表は、例年9月上旬だった。しかし、鳥取大学で総合型選抜Ⅱの導入が初めてであったことから、初年度はできるだけ早く告知することを検討した。その結果、地域学部と農学部で実施している総合型選抜Ⅰ¹⁾と同時期とした。今回は、入学者選抜要項と同じ日の2024（令和6）年7月19日に公表した（鳥取大学、2024c）。なお、2026（令和8）年度入試以

降は、従来と同じく9月上旬の公表を予定している。

2.3.1 提出書類

提出書類は、調査書、大学入学共通テスト成績請求票以外に「自己推薦・志望理由書」を求めた。自己推薦・志望理由書は、次の2つの項目について、それぞれ300字以内で記述させた。

1. あなたが高校時代に力を入れて取り組んだ活動と、その活動を経てあなたが得たものについて、具体的に記述してください。
2. あなたが本学科で学びたいことや挑戦したいことについて、具体的に記述してください。

当初は、地域学部や農学部で行っている総合型選抜Ⅰと同様、2,000字程度の記載を求める学科もあった。しかし、基礎学力重視の入試であることを示すため、また、記載文字数を多くしても、面接でそれらに関する質問をする必要性がどこまであるかを考えて欲しいと助言し、最終的に記載文字数を合計600字以内とした。これらはインターネット出願システムに入力する方法を用い、印刷物の提出は求めなかった。

2.3.2 配点

大学入学共通テストの教科・科目と面接の配点を表3にまとめた。

表3 2025年度鳥取大学工学部総合型選抜Ⅱの配点

学 科	教 科 等					合 計	
	国 語	数 学	理 科	外 国 語	情 報 面 接		
機械物理系		18	18	9	15	60	
電気情報系		36	■9	9	■9	8	62
化学バイオ系	■9	9	18	■9		10	46
社会システム 土木系		18	9	9	10	46	

*■は、選択科目を示す

*数学は、2科目の合計点である

機械物理系学科では、理科（物理）の得点を2倍とし、物理の学力を重視した配点とした。また、他学科と比較して面接の配点が大きいことも特徴である。電気情報系学科では、数学2科目とも得点を2倍とし、数学の学力を非常に重視した配点で全体に占める数学

の割合が 6 割近くとした。化学バイオ系学科では、数学を半分に、理科は 2 倍と大きく傾斜した配点とした。社会システム土木系学科では、傾斜配点を行わず、すべての科目を同等に評価した配点とした。

さらに、今回は、段階表示で一定の得点以上であることを合格の条件とした。具体的には、機械物理系学科と電気情報系学科で、3 教科 4 科目の段階表示の合計点が 18 点以上、化学バイオ系学科と社会システム土木系学科で 16 点以上とした。この合計点の設定は、過去 4 年間の一般選抜前期合格者の 5 教科 7 科目の段階表示の平均点で下位 25% から最低点より若干上の下位 10% 程度だった。さらに、電気情報系学科では、数学 2 科目の段階表示の合計点が 10 点以上の条件も付した。

このように全学科が段階表示を用いることで、合格するための学力基準を明確に示すことができた。このことについては、第 3 章で詳しく述べる。

2.4 志願状況

学科ごとの募集人員と志願者数、合格者数を表 4 にまとめた。志願者数は 52 人で、すべての学科で募集人員を上回った。志願倍率は学科で 1.2 倍から 2.0 倍、工学部全体では 1.5 倍だった。

表 4 2025 年度鳥取大学工学部総合型選抜Ⅱの募集人員・志願者数・合格者数

学 科	募集人員	志願者数	合格者数
機械物理系	10	17	7
電気情報系	5	10	4
化学バイオ系	10	12	8
社会システム土木系	10	13	10
合計	35	52	29

表 4 には加えていないが、志願者の男女別では、男性 41 人、女性 11 人で女性の割合は 21% だった。これまでの工学部一般選抜の割合（直近 5 年で 17%）よりもやや高かったが大きな差ではなかった。

また、総合型選抜であるため、卒業年次の条件を設けなかった。その結果、卒業見込者 45 人、既卒者 7 人で既卒者の割合は 13% だった。これも近年の工学部一般選抜での既卒生の割合と比較して同程度だった。

次に、志願者の出身高等学校等の所在地を表 5 にまとめた。志願者の約半数（25 人）が鳥取県の高専出身だった。また、鳥取県に隣接する県を合わせると 37 人で全体の 70% を超えた。一般選抜では鳥取

県の割合は 10 ~ 15%、学校推薦型選抜でも多くて 30% 程度であることを考慮すると、2.2.1 で記載したように、鳥取県を中心とした鳥取大学を地元の大学として認知している県からの出願が圧倒的に多く、期待した結果となった。

表 5 2025 年度鳥取大学工学部総合型選抜Ⅱ
志願者の出身高等学校等の所在地

所在地	合計	機械	電気	化学	社会
鳥取県	25	4	6	6	9
鳥取県の隣接県	12	6	1	3	2
それ以外の県	15	7	3	3	2
合計	52	17	10	12	13

* 「鳥取県の隣接県」とは、兵庫県、島根県、岡山県、広島県の 4 県である

2.5 試験（面接）の実施

今回の総合型選抜Ⅱでの個別試験は、面接のみを実施した。まず、今回の入試では志願者全員が受験し、志願者のすべてが受験者となった。面接は、いずれの学科も個人面接の形式で行った。1 人の受験生に対し、複数人の面接官が自己推薦・志望理由書に関しての質問をした。その際の面接時間と面接官の人数、面接の配点、および、全体の配点を表 6 にまとめた。

表 6 2025 年度鳥取大学工学部総合型選抜Ⅱの面接時間、面接官の人数、配点（面接／全体）

学 科	時間／分	人数	配点 (面接／全体)
機械物理系	10	3	15 / 60
電気情報系	8	4	8 / 62
化学バイオ系	20	3	10 / 46
社会システム土木系	15	3	10 / 46

面接時間はすべての学科で違っていった。面接官の人数や質問内容は、各学科によって異なるため、それらを揃える必要はないが、総合点に占める面接の配点と面接時間は、比例関係になくまちまちだった。

2.6 合否判定

初めて実施した鳥取大学工学部総合型選抜Ⅱの合格者は、募集人員 35 人を下回る 29 人だった。今回の入試では、段階表示で一定の得点以上であることを合格の条件とした。そのために設定した得点を下回った者は、不合格となった。その後、面接点や教科・科目の傾斜をかけて合否判定をするが、今回は、段階表示

で一定の得点を上回った者の全員を合格者とした。これは、いずれの学科もその人数が定員と同じかそれ以下となったためである理由以外に、面接で極端に悪いと判断された者がいなかったためである。

合格者の出身高等学校等の所在地を表7にまとめた。鳥取県は17人と合格者の約6割だった。さらに、鳥取県に隣接県を含めると23人と全体の約8割だった。2.2.1で記載したように、鳥取大学を第1志望とする傾向が強い地域からの入学者が多く、鳥取県出身者の入学者増加に貢献する結果となった。なお、合格者全員が入学手続きをしたため、合格者はすべて入学者となった。

表7 2025年度鳥取大学工学部総合型選抜Ⅱ
合格者の出身高等学校等の所在地

所在地	合計	機械	電気	化学	社会
鳥取県	17	3	2	5	7
鳥取県の隣接県	6	2	0	2	2
それ以外の県	6	2	2	1	1
合計	29	7	4	8	10

*「鳥取県の隣接県」とは、兵庫県、島根県、岡山県、広島県の4県である

3 高等学校教員の意見

総合型選抜や学校推薦型選抜において、大学側が想定するように志願者が増えない事例が見られる。この要因の1つに評価基準の不明確さである。多くの場合、総合型選抜や学校推薦型選抜では、成績開示を行われず、小論文や口頭試問、面接での点数がどの程度なのか、全体の順位も不明である。その結果、不合格の場合はもちろん、合格した場合でも「なぜ合格したかわからない」といった声を高校側から聞くこともあった。評価基準が不明確であると、恣意的に合否判定をしているとの疑念を抱かれることにつながりかねない。

今回、工学部で実施した総合型選抜Ⅱでは、各学科が必要とする大学入学共通テストの3教科4科目において、段階表示で一定の得点以上であることを合格の条件とし、必要な学力を明確にした。このことで、これらの疑念を払拭できると考えた。

そこで、合格発表以降、志願者があった鳥取県内高等学校の進路指導部長などの教員に意見を伺った。新入試の発表直後は、段階表示がどのようなものであるかの理解が乏しく、その説明に苦慮する場面もあったが、段階表示の5点は偏差値換算で50程度、4点は45程度と具体的に数値を示すとイメージしてもらえた。また、模擬試験では、科目ごとに全国順位が明示

されており、上位から41～60%の間は段階表示で5点、61～77%の間は4点であると説明で理解できたとの声もあった。段階表示が合格基準を示すものであるとわかると「基準が明確で分かりやすく、第1志望とする生徒に向かわせやすい」との評価を得た。

4 おわりに

千葉大学が2026（令和8）年度入試から大学入学共通テストの段階表示を活用することを告知している（千葉大学、2023）。千葉大学国際教養学部国際教養学科では、従前から総合型選抜を実施していた。2025（令和7）年度の入学者選抜実施要項に記載されていた日程では、10月下旬に課題論述、集団面接及び個別面接を実施、11月22日に合格内定者を発表となっていた。その合格内定者には、大学入学共通テストの成績請求票を送らせて、大学入学共通テストで指定した6教科8科目を受験し、その教科・科目の成績（配点）の総得点が70%に達している者を最終合格者にするとされていた（千葉大学、2024）。

それが2026（令和8）年度入試から「総得点が70%に達している」の部分が「段階表示を用い、段階6の科目が4科目以上（うち数学①、数学②、理科から1科目以上）」にすると、2023（令和5）年12月に公表し、令和8年度入試の募集要項にも記載されていた（千葉大学、2025）。

このように、大学入学共通テストを資格試験のように一定の学力基準を評価する方法としての活用が他大学でも検討されつつある。特に、選択科目が同一教科ではなく、他教科にまたがる場合、段階表示の利用は有用であると考えられる。大学入学共通テストにおいて、同一教科内の科目間格差を是正する得点調整は、平均点の差が20点以上、もしくは、平均点の差が15点以上で、かつ、段階表示の区分点差が20点以上生じた場合に限られる（大学入試センター、2024）。他教科の間での得点調整は無く、選択教科・科目の幅が大きいと、年によっては不公平感が生じられると思われる。これらを解消する1つの方法として、段階表示の利用は、非常に有効な方法と推察される。

特に、総合型選抜や学校推薦型選抜のように定員が少ない募集の場合、合否の不明確さが出願を踏みとどまらせる要因とも考えられる。大学入学共通テストの段階表示の活用は、明確な学力レベルを提示できることから、これらの選抜での有用であると推察される。さらに、18歳人口の減少により一般選抜においても活用が期待される場所である。

入試のことを入学者選抜と呼んでいるが、今後、多

くの大学では「選抜」の機能が働かなくなることが予測される。一般選抜においても、志願者が募集人員を下回り、全員合格をさせ、単に学生確保をするだけでは学力低下は免れない。大学入学共通テストを利用する入試を実施する場合、段階表示を活用することで、当該学科（専攻・コース）での必要最低限の学力レベルを示すことができ、アドミッション・ポリシーの明確化につながると考えられる。

注

1) 2024(令和 6)年度入試までは、単に「総合型選抜」としていたが、大学入学共通テストを課す総合型選抜の実施に伴い、大学入学共通テストを課さないものを「Ⅰ」、大学入学共通テストを課すものを「Ⅱ」とした。

謝辞

鳥取県内高等学校教員からの情報収集に協力をいただいた、元鳥取大学教育支援・国際交流推進機構入学センター特任教授 尾室真郷氏に感謝いたします。

参考文献

- 千葉大学 (2023). 「令和 8 年度千葉大学入学者選抜方法の変更について (予告)」
https://www.chiba-u.ac.jp/admissions/gakubu/R8yokoku_houhou1_202312.pdf (2025 年 7 月 31 日閲覧)
- 千葉大学 (2024). 「令和 7 年度千葉大学国際教養学部総合型選抜学生募集要項」
<https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/14349337/www.las.chiba-u.jp/admission/files/pdf/bosyuyoko.pdf> (2025 年 11 月 20 日閲覧)
- 千葉大学 (2025). 「令和 8 年度千葉大学国際教養学部総合型選抜学生募集要項」
<https://www.las.chiba-u.jp/admission/files/pdf/bosyuyoko.pdf> (2025 年 7 月 31 日閲覧)
- 中央教育審議会 (1999). 「初等中等教育と高等教育との接続の改善について (答申)」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/991201f.htm (2025 年 7 月 31 日閲覧)
- 大学入試センター (2024). 「令和 7 年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト受験案内」
- 森川 修, 三井規裕, 山根俊喜 (2024). 「大学入学共通テストの段階表示を合否判定に用いた新しい入試制度の設計」『大学入試研究ジャーナル』 **34**, 163-168.
https://doi.org/10.57513/dncjournal.34.0_163
- 沖 清豪 (2025). 「大学入学共通テストの段階表示換算表

- 導入の論理と現状」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』 **70**, 155-172.
- 静岡理工科大学 (2022). 「一般選抜用入学者選抜要項 [2023 年度]」
https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/12894201/www.sist.ac.jp/about/assets/2023_nyusiyokou_ippan.pdf (2025 年 11 月 20 日閲覧)
- 静岡理工科大学 (2024). 「一般選抜用入学者選抜要項 [2025 年度]」
https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/14117724/navi.sist.ac.jp/media/2025_nyushiyokou_ippan.pdf (2025 年 11 月 20 日閲覧)
- 鳥取大学 (2024a). 「令和 7 年度鳥取大学入学者選抜の実施教科・科目等について (予告)」
https://www.admissions.adm.tottori-u.ac.jp/wp-content/uploads/2024/03/r7_kyokakamoku-20240319.pdf (2025 年 7 月 31 日閲覧)
- 鳥取大学 (2024b). 「令和 7 (2025) 年度入学者選抜実施要項」
https://www.admissions.adm.tottori-u.ac.jp/wp-content/uploads/2024/10/r7_senbatsuyokou_20241029.pdf (2025 年 7 月 31 日閲覧)
- 鳥取大学 (2024c). 「令和 7 (2025) 年度総合型選抜Ⅱ学生募集要項 (大学入学共通テストを課す総合型選抜)」
https://www.admissions.adm.tottori-u.ac.jp/wp-content/uploads/2024/07/R7_sougougata2_yokou.pdf (2025 年 7 月 31 日閲覧)